The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

印度學佛教學研究第五十一巻第二号　平成十五年三月

唐道宣と義天の修観

安重喆

唐南山大師道宣（八二七―八九八）は戒律の実践において唐代第一の律師だけではなく有名な仏教史家であり、教観竝修によって理論と禅的体験の兼修を主張し、力行実践した人物である。一方高麗の大覚国師義天（一〇五五―一一〇一）は知訥の定慧荘雙修とともに教観竝修を修行の旗幟に立てた高麗仏教の代表者として指称されている。時代的には道宣の入寂の後の一五七に義天の出生したのであるから時期的には長い間の差があるが、義天は『大覚国師文集』において道宣の修行家風を大きく欽慕し高く評価していることがよく知られている。従って、義天と道宣の修道観又は修観を察することによって、義天の修観の形成背景に道宣が如何なる影響を及ぼしたのであるかを眺めて見ることとする。

まず、義天は『大覚国師文集』において三の所で道宣について記述している。第一は道宣の教観思想の修道観の内容を含んでいながら特に観法に基づいて禅的体験の実践を教養している修行指針書である『浄心誡観法』を引用したのものである。即ち、義天は『大覚国師文集』で唐道宣の著書『浄心誡観法』を次の如く引用している。

今時末法衆生心薄　背恩絶義　楽獨幽閑　適情自在　恐不如法　堕於悪道[1]

さらに、第二は道宣の著書の『四分律刪繁補闕行事抄』について述べられている文である。多くの戒律に関する名著をのこしているだけでなく厳格な戒律の実践者として有名であった道宣が自利に止らず、衆生の救済の為の利他の菩薩行に全力を尽くすことによって上求菩堤と下化衆生の先駆的生を生きた道宣の『四分律刪繁補闕行事抄』を引用し次のように述べている。

四分律抄云　約行則　山水不同　今大師不拘小節　弘法為心　或山水坐禅　或人間行　化自他　兼利喧静同観故也[2]

とある。

第三は義天が宋の大智律師元照（一〇四八―一一一六）より法を受け継がれ、さらに、元照は道宣の高い修行家風を受け

NACSIS-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

継がれていると記している文である。『大覚国師文集』の詩の一に次のようにある。

某伏蒙寶閣　照律師辱示佳篇仍以道具　為因固抒拙詩用伸記徳
内密圓修外糞衣三千細行炳威儀己顛大表今還樹　應是南三再秉持[3]

以上三の文を眺めて見たのであるが、再び第一の文から論究してみることとする。第一の文は末法衆生達の根機のうすいのをいましめている文であり、第一篇より三十篇に成っている『浄心誡観法』の最後の三十篇に出てくる文である。前述のように義天は彼の著述の中で述べているように道宣の戒律系統の著書の『四分律鈔』等を好んでよく講義したと言うのであり、道宣の浄心誡観法で説かれている内容に関しても第一篇から三十篇までよく通達しているはずである。従って、『浄心誡観法』に説かれる修観と義天の『大覚国師文集』に説かれる修観の一致する文章を比較しながら探ってみることにする。

『浄心誡観法』では教観竝修の修道観について次のように述べられている。

雖観文字空　要須偏讀經　唐尋聖者義　般若漸得成…雖観諸行空
對塵修五停　貪癡結使斷　寂滅心安寧　十八界雖妄　出生於珍寶
観解衆縁義　不生亦不老　教観十八空　六塵莫敗著[4]

即ち、文字は空であることを観じても経典は普く渉猟しなければならないのであり、遍く善知識（聖者）の教えを求めることによって般若を得ることができ、諸行の空であることを観じても煩悩に対して五停心観法で対治しなければならないこと、三毒の煩悩を断絶した境地が涅槃であること、十八界が空であるといえどもその中からあらゆる珍宝が出でくるからそのような因縁の和合の道理をよく観じなければならないこと、十八空を教相として習い、観心を以って修することによって仏法を悟ることができると言うのである。いいかえれば仏教の本来面目の境地は心行處滅であり、言語道断であるから言語の断ぜられた観法に基いて禅の実践によって接するといえども世俗の中に仏法があり、仏法の中に世俗があるから周く経学を学び、善知識を訪ねて工夫しなければならないと言う教相門と観心門即ち、理論と実践の均衡のとれた修観を説いているのである。さらに、経、律、論の三蔵については次の如く述べられている。

凡是諸経律　甘露亦毒藥　解服百疹膠
不消病發作……静坐好思量　觀察自忖度[5]

諸の経論は甘露でありながら毒薬のようなものであるから消化をよくさせれば万病を治すことができるのであるが、そうでなければかえってあらゆる病を起す原因になると言うのである。経典を学ぶ時回心返照する心の工夫がともなわなければ三蔵の理解は利益がないのであり、学問と共に内蔵自省する実践的禅の修行が相伴なわなければならないことを力説し

NACSIS-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

ているのである。特に道宣は仏道に入門する時大小乗を問わず必ず修すべき観法として「五停心観」を挙げ、次のように述べられている。

自知欲情多　一向不浄　自知瞋恚多　一向修慈悲　自知愚癡多　諦観十二因　自知我慢多　諦觀十八界　自知亂想多　常數出入息[6]

貪瞋癡の三毒等を断ずる為には不浄観法を始め五種類の「五停心観法」を実修すべきだと言うのである。それでこの観法を修する理由については次のように説いている。

何故令修五停觀法止逐講論　有二要法　一者佛教次第入道對治鹿種煩惱　二者見解法義人[7]

仏道に入門する時講論を学ぶ前に五観法を先に修するのはあらゆる煩悩に対治して断ずる為であると言うのである。この外にも仏道実践の指針書とも言える『浄心誡観法』で道宣は一貫して理論と実践の兼修即ち、教門と観門の竝修的修観を説いていることを至る所で見ることができるのである。

次は義天の教観竝修に関する修道観を眺めてみることにしたい。彼は教相門と観心門即ち、理論と実践を同時に修しなければならないことを次のように言っている。

不學觀　唯授徑　雖聞五周因果　而不達三重性徳　不授徑　唯學觀　雖悟三重性徳　則不辨五周因果　夫然則觀不得不學徑不得不授也[8]

即ち、観を学ばずに経だけを見るものは五周の因果を聞くと雖も三重の観門の大きい性徳に達することができないのであり、経を知らずに只観だけを修するものは三重の生徳を悟るといえども五周の因果を分別することができないと言うのである。従って、観を修せざるを得ないのであり、経を学ばざるを得ないと述べられている。それで、彼が教門と観門に心を尽くしたのはこの言葉を銘心した為であると言い次の如く説いている。

吾之所以盡心於教觀者　佩服斯言故也[9]

さらに、義天は教観両門に対する見解を次のように表出している。

夫法無言像　非難言像　離言像則倒惑　執言像則迷眞　但以世寡全才　人難具美　故使學教之者　多棄内而外求　習滯而邊　其猶爭兎之短長　鬪空花之濃淡[10]

即ち、真理は言葉と形相がないものであるが、だからといって形相と言語が離れていることでもない。言語と形相が離れていると迷におちいることとなり、言葉と形相に執着すると真に迷したことになるといい、結局、教門と観門の均衡のある修道観が修行の正路であることを示しているのである。義天の教観両門に対する見解はこれだけではない。さらに、彼は古禪と今禪の禪教観について次のように述べられている。

古禪之與今禪　名實相違也　古之所謂禪者　籍教習禪者也　説禪者執其名而　遺其實　習禪者　因果詮而得其旨　救教矯詐之弊

NACSIS-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

復古聖醇精之道[11]

これは宋の戒珠の作した『別傳心法議』と言う書を義天が王旨をうけて刊行する時跋文に付けて記述している文である。彼は古禅と今禅の名と実の相互いに乖離していることを述べ、古禅は教によって禅を修する修禅であったのに対して今禅は教を離れて禅を説する説禅になってしまったといい、今日の禅の弊を改めて醇精の道に帰することとすると言うのである。

次は義天が宋の大智律師元照（一〇四八―一一一六）より法を受け継ぎ、元照は南山道宣律師の法を受けつぐことによって、道宣の道風が再び高くなったと言う前述の内容に関するものである。元照が義天の為に教説したという『芝苑遺編』の「為義天僧統開講要義」には次の如くある。

一切衆生本具常住真精妙性　其体清浄其用自在其相平等　不分而分強説三義聖凡一体依正不二　推之於心則為心推之於物則為物則知世出世間諸所有法同一真性等無差別[12]

しかるに、義天の『大覚国師文集』にも上記の内容とまったく同じ文章が次のように述べられている。

其体清浄　其用自在　其相平等　不分而分　故諸衆生　虚妄顛顛倒　於清浄中而生染着　故為煩惑　於自在中而起纒故為漏業於平等中而起分別[13]

これは義天の体、相、用に対する見解であるが、元照の「為義天僧統開講要義」の文章と義天の『大覚国師文集』に説かれる文章と内容の同じ部分はこれだけではない。即ち、あの二人の著述の中にまったく同じ文で述べられるのは次のようにつづくのである。

諸衆生虚妄顛倒　於清浄中而生染著故為煩惑　於自在中而起纒故為漏業　於平等中而起分別故為苦報[14]

義天と元照の見解を検討してみると義天が『大覚国師文集』で我々の心を以ってその本体は清浄、作用は自在、属性は平等であると説いているのに対し、元照は『芝苑遺編』の「為義天僧統開講要義」に於いて我々の心を「真精妙性」と説いており、二人の観点が一致していることがよく知られるのである。

以上のように義天の『大覚国師文集』で引用している唐道宣の著述の『浄心誡観法』の修道観と義天の『大覚国師文集』に説かれる義天の修道観を中心に論究したのであるが、あの二人の修観は教観両門の竝修及び兼修を主張している点において一致していることが見られるのである。しかも、元照の「為義天僧統開講要義」の文に見られるように義天と元照の仏教観は少ない部分において文章と内容がまったく同じものになっていることは特に注目すべきものである。又、義天が自身は元照より法をうけつぎ、元照は道宣より高い修行家風をうけついでいると言うことから見ると、義天の修観形成の背景には道宣の影響がどのような形にしてもあったのではな

NACSIS-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

いだろうかと思われるのである。

1 『大覚国師文集』巻三（韓国仏教全書）四、五五七上
2 同　五六四上
3 同　五五八中
4 『浄心誠観法』（大正）四五、八二七中
5 大正四年　八二一下
6 同　八二〇中
7 同　八二〇上
8 『大覚国師文集』巻三（韓国仏教全書）四、五五六下
9 同　五五六下
10 同　五三一中下
11 『別傳心法議』巻一（卍続蔵経）一〇一、〇三二三
12 『芝苑遺編』巻一（卍続蔵経）一〇五、〇三二三下
13 同　一〇五　〇五六〇下
14 同　一〇五　〇五六〇下
15 『大覚国師文集』巻十七（韓国仏教全書）四　五五八中

（キーワード）修観、道宣、義天

（東国大法師兼講師・文傳）

掲載されなかった諸氏の発表題目（三）

敦煌写本『維摩詰経解』（二）
池麗梅（東大大学院）

普徳和尚門下　創建十刹の比定問題
梁銀容（圓光大学校教授）

元暁における「信」と「他力」について
康東均（東亜大学校教授）

元暁の『勝鬘経義疏』（新出）について
水尾現誠（四天王寺国際仏教大教授）

別行本「普賢行願品」の韓国仏教の信仰に及ぼした影響
蘆在性（中央僧伽大教授）

NACSIS-Electronic Library Service